

今年は子年。十二支の最初、スタートの年です。  
各年代を代表して、5名の皆さんから、今年にける夢や抱負、  
お正月の思い出、まちづくりへの期待など、  
さまざまな思いをお寄せいただきました。

# 子年 生まれ 集合!!



## 年賀状配達で季節を感じ



宝本 国芳さん(甲南町)

昭和47年生まれ

子どものころのお正月といえば、田んぼの真ん中でたこ揚げをしたり、かるた、すごろくで遊んだりという思い出があります。

また、勤務先が郵便局であり、「お正月といえは年賀状」で仕事を通してお正月という季節を感じていました。皆さんが心待ちにされている年賀状の道順作業は大変でしたが、配達上で「寒いのにご苦労さま」と声をかけていただくお客さまも多く、うれしく励みになりました。

昨年10月に郵便局が民営・分社化し、私は郵便局会社勤務となり、配達業務を行わなくなりました。今まで子どもたちの相手ができなかった分も、今年のお正月は、自分の子どもころの遊びを教えたりして、子どもたちとの時間を楽しみたいと思います。

甲賀市は、緑あふれるまち。開発が進み便利になっても豊かな自然は守り続けていきたいですね。

## 大好き甲賀市



玉井 凱さん(土山町)

平成8年生まれ

ぼくは、平成8年8月8日生まれて、今年12歳になります。ぼくが、土山小学校に転校してきて4年経ちます。39人の1クラスという少ない人数だけど、みんなが仲良く毎日楽しい学校生活を送っています。土山小学校に来て、本当に良かったと思います。

ぼくが今、一生けん命取り組んでいることは、野球です。野球は、ぼくに、持久力や体力をつけてくれるスポーツです。去年は、第1回市長杯で優勝しました。これからも、野球の好きな仲間と、がんばって練習をして、楽しい野球をして、大会で優勝をめざしていきたいです。

これからの甲賀市は、ゴミゼロ滋賀県NO.1になって、緑いっぱい、ぼくたちの自まんでできる甲賀市になって、住んで良かったと思われたいまちになってほしいです。

## 自分らしく1年を重ねたい



植田真由美さん(信楽町)

昭和35年生まれ

結婚26年目を迎えます。子どもたちはそれぞれに自分の道を歩き始め、親業もひと段落です。私なりに妻、母、嫁として全力疾走してきました。48歳：ぼちぼちスピードダウンして自分の足元を見つめ直す時期かと思えます。

今まで一念発起という言葉とは無縁で、危うきには近寄りず、転ぶ前にやめてしまふ、楽な道ばかりを選んできました。子どもの頑張る姿を見て恥ずかしく思い、「今年こそは」と自分に言い聞かせています。

仕事柄、たくさんのお年寄りに出会います。癒やし癒やされ、若輩ながら悟ったような口をきいているかもしれません。自分を活かせる道かと思っ楽しんでいきます。

仕事、ボランティア、100歳を迎える祖母の介護、やりたいこと、やらねばならないこと多々あります。肩の力をぬいて、あせらず充実した年を重ねていきたいと思えます。

家業の製茶業も手伝っています。地産地消に取り組み甲賀市であってほしいと思えます。

## 思い出に残る「三社参り」



雲 里佳さん(甲賀町)

昭和59年生まれ

私の地域では、「三社参り」という風習があります。中学生のころから、自転車で行った三社参りは、何年も続いた印象深いお正月イベントのひとつです。この三社参りとは、近くの三つの神社を参るのですが、一年の健康と希望を祈願する意味があることは、後々知りました。

夜に友達と出かけることや、神社で多くの方々に会おうということは、日常では味わえない特別なもので、当時はとてもワクワクしました。

今は職業もバラバラで、あのかの友達と三社参りしながらお正月を迎えることはないのですが、中学生の妹は、今年も三社参りに行きました。

妹も同じように、三社参りを楽しんでいる姿を見ると、あのかのときのことを思い出します。

甲賀市は、地域の人やお年寄りが活動できる場所や、チャンスがあると思うので、もっとみんなが参加できるまちになってほしいと思います。

## 子の歳の雑感



井上 博文さん(水口町)

昭和23年生まれ

とうとう60回目の正月を迎えることになってしまった……という気持ちで偽らざる今の私の心境である。

まだ敗戦のなごりが色濃く残る昭和23年、貴生川駅にほど近い虫生野の農家の次男として生まれた。

駅のホームには、傷痍軍人さんの姿が当たり前のように見受けられ、その傍にはヤミ米を運ぶおばちゃんもいた。おそらく日本全土が、今日明日を生き抜くため必死に暮らしていた時代であったのだと思う。思う……とは当時、幼児であった私には当たり前の日常風景であって、さしたる感慨もなかったはずである。

一般的には、水道もなく、テレビもなかった時代である。現在の荒廃した社会や利己主義崇拜の流れを食い止め、相互扶助、思いやりあふれる市町、国政実現に、一市民として普通に気楽に参画したいものである。